日本古典文學大系58

蕪村集 一茶集

暉峻康隆
川島つゆ
校注

岩波書店刊行

日本古典文學大系 58

蕪村集 一茶集

潁原退蔵
尾形仂
堀切実
栗山理一
丸山一彦
中村俊定 校注

岩波書店刊行

蕪村集 一茶集　　日本古典文学大系 58

昭和 34 年 4 月 6 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 1 月 30 日 第 15 刷 発行

定価 2100 円

校注者　暉峻康隆（てる おか やす たか）
　　川島つゆ（かわ しま）

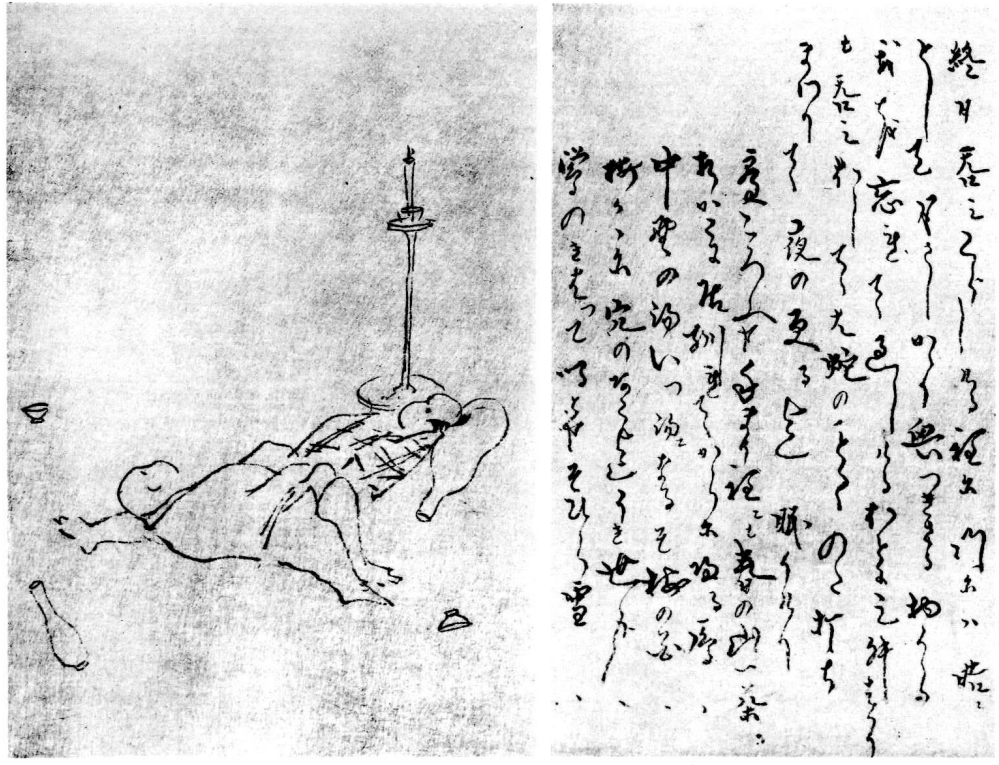
発行者　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
　　岩波雄二郎

印刷者　長野市中御所 2-30
　　田中忠

発行所　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

燕村自筆のくばりもの



一茶自筆「まん六の春」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

蕪村集

解説……五
凡例……三八
俳句篇……三九
連句篇……二〇三
和詩篇……二五七
文章篇……二六九
補注……二九八

一茶集

解説……三〇一
凡例……三一九
俳句……三二一
連句……三六三
父の終焉日記……四〇三
おらが春……四三一
文集……四七九
補注……五三〇

蕪村集

暉峻康隆 校注

解説

生涯

中世的なものの発展、もしくは否定という形で、芭蕉と西鶴とによって、近世的な詩(俳諧)と小説(浮世草子)が十七世紀末に完成すると、その後は当然、それらの普及、マスコミの時代をむかえた。十八世紀前半のいわゆる享保時代は、俳諧・小説ともに質的低下を前提とする盛大なマスコミの時代である。俳諧にかぎっていえば、江戸俳壇における其角の洒落風、不角一派の化鳥風、二世湖十一派の浮世風など、大衆化にともなう詩情の卑俗化ははなはだしい。地方では後に支麦の徒とののしられた支考一派の美濃風、涼莵に発する伊勢の麦林風、其角門から出て京阪で栄えた半時庵淡々の浪花振など、平俗の一語につきる。そのエネルギーが、向上よりも普及へついやされた当然の結果であった。

人間の精神のはたらきによる抵抗運動を、われわれは歴史的必然という。全国俳壇の卑俗化が完了すると、失われた高邁な詩精神への渇きが、全国各地に連鎖的な抵抗運動をひきおこした。そのおもなるものは、江戸の大島蓼太・加舎白雄、伊勢山田の三浦樗良、名古屋の加藤暁台、加賀の堀麦水・高桑闌更、京の炭太祇・与謝蕪村などであり、そのスローガンは、「芭蕉へ帰れ」であった。しかしそれはもちろん、詩の浄化作用の拠点という意味においてであって、中世的な世界観に規定されたそのポエジイの全面的な復活をのぞんだわけではない。またのぞんでも、すでに変化した歴史的・社会的条件によってそれがゆるされなかった事情については、「人と理念」の章においてふれることにしたい。そう

して「芭蕉へ帰れ」というスローガンをかかげながらも、やせ枯れた「さび」の美意識によって統一された元禄蕉風とは異質の、浪漫的・抒情的な中興俳諧のかがやかしい季節をむかえたのである。

当時の俳壇的勢力において、蕪村は江戸の蓼太や名古屋の暁台におよぶべくもなかった。しかし実力において、当時すでに第一人者としてみとめられていたし、明治以後の近代俳句に対する影響力も、芭蕉につぐ存在であることは、あらためて指摘するまでもない。国民詩俳諧の俳風を芭蕉と二分した蕪村の俳諧の本質を理解する作業の第一段階として、まずその生涯のあらましを見ておくことにしたい。

蕪村の姓は谷口、また与謝といい、宰町・宰鳥・落日庵・紫狐庵・夜半翁・夜半亭(二世)・蘧道人と号し、画家としては子漢・四明・三果園・三果居士・長滄・長庚・春星・東成・謝寅などの号がある。享保元年(一七一六)といえば、芭蕉の没後二十三年目、同年の八月には山口素堂が、十月には小西来山が没するなど、いわゆる享保俳壇の俗化がはじまった頃、摂津国東成郡毛馬村(大阪市都島区毛馬町)に生まれたのであるが、父母の姓名・家柄・幼名・通称など、いっさい不明である。諸種の資料から帰納して、かなりゆたかな農家の子であり、早く両親と家産を失い、享保末年、十八、九歳の頃、江戸に出て画俳を志したことが推定されるのみである。大江丸の「俳諧袋」によれば、江戸へ出た蕪村は、まず談林系の内田沾山に師事し、のち夜半亭早野巴人(宋阿)の門に入ったとある。ところが昭和十四、五年、志田義秀氏と杉浦正一郎氏によって、元文元年(一七三六)十二月に没した足立来川門の西鳥こそ、出府早々の蕪村であるという新説が提出されたが、まだ確認されるにいたっていない。

元文二年、二十二歳の秋、同年四月に在京十年の京都俳壇を引上げてきて、日本橋石町に俳席を開いた夜半亭宋阿(其角・嵐雪門、元文四年歳旦帖より宗阿あらため宋阿)の門に入って、宰町と号し、その後元文四年中に宰鳥と改号している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

当時の蕪村は宋阿門の秀才として江戸俳壇にみとめられる一方、元文二、三年頃の執筆と推定される「俳仙群会図」などによって、画人たるべき素質と志望を示している。ところが二十七歳の寛保二年（一七四二）六月に、師宋阿が没したので、俗化した江戸俳壇にあきたりなかった宰鳥は、秋江戸を去って、同門の親友、下総結城の砂岡雁宕（いさおかがんとう）のもとに身を寄せることになった。砂岡家は慶長十年九月、結城家が越前へ移封の際に、結城の遺跡を保護するため、家臣の中からえらんで残した十人衆の中の一家で、結城の素封家である。またその父我尚は宋阿の俳友であった。結城には雁宕のほかに、同じく宋阿と同門の早見晋我、およびその子の桃彦・丈羽・楚江らがおり、下総の関宿には阿誰（あすい）・浙江（せっこう）父子、常陸の下館には風篁（ふうこう）・大済らの先輩がたむろしていた。

そういう俳系をともにする暖かい雰囲気の中で、それから十年間、宝暦元年（一七五一）に京都へ移住するまで、奥羽にまで足をのばした放浪生活のうちに、蕪村はその画業と俳業の基礎をかためたのであった。画家としては漢画に傾倒した時期で、子漢・朝滄・四明の号を用いている。俳人としては二十九歳の延享元年（一七四四）に、下野宇都宮で歳旦帖を編み、この時宰鳥を蕪村と改めており、有名な和詩「北寿老仙をいたむ」も、その翌年、彼をわが子の如く愛していた早見晋我の死をいたんでの作である。

放浪十年の生活を切り上げて、亡師宋阿が扶植した門流の先輩同志、宋屋・随古をはじめ、几圭（きけい）・嘯山・武然・移竹らのたむろする京都へ向ったのは、三十六歳、宝暦元年冬のことであった。しかし当時の蕪村の目的は俳諧よりも画業の達成にあり、宝暦四年春には京を去って丹後宮津の見性寺におちつき、画を主とし俳を余技として、同七年の秋まで留まること四年、まだ漢画趣味を脱し切っていないが、いわゆる与謝風といわれる一時期を画している。主として朝滄の落款を用いているので、この時代の作品を普通に「朝滄書き」という。彼が文人画の先駆者の一人、八僊観彭城百川（はっせんかんさかきひゃくせん）の影響をうけたのも、この前後のことである。

したがって四十二歳の宝暦七年九月に帰京して後、明和初年までの十年間の彼の業績は、画をもっぱらとし、俳諧の見るべきものはない。宝暦八年の「寒山拾得図」、同十年の「清蔭双馬図」、同十三年の「野馬図」「春秋山水図」など、大作を次々に発表し、いちじるしい進歩と画名をかちえている。しかもこの間、宝暦九、十年頃、蕪村がとも女を妻にむかえたのも、画家として一家をなすに至ったからであろう。しかし、明和三年（一七六六）三月、夜半亭門流の棟梁であった望月宋屋が没すると、余技とはいえ衆にぬきん出た俳人蕪村は、夜半亭門の中心人物とならざるをえなかった。同年夏、彼が中心になって、太祇・召波・鉄僧・竹洞・印南・峨眉・百墨らを社友とする俳諧の結社「三菓社」が結成された。それでもまだ生活と結びついた画業に追われ、明和三・四・五年頃は、再三讃岐地方へ画行脚に出かけ、五年には有名な丸亀妙法寺の襖絵を残している。しかし明和五年四月に帰京の後は、ながらく中絶していた三菓社句会に力をそそぎ、蕪村調の佳句をぞくぞくと吐いている。その結果、衆望をになって、明和七年（一七七〇）三月、久しくすておかれた夜半亭を継承して点列に加わり、ここに中興期京都俳壇の雄蕪村の位置が確立したのである。時に五十五歳、画業成ってのちの俳人蕪村の登場である。

この時、京都の夜半亭門における俳諧相続者であった故高井几圭の男で、後に蕪村のあとを継いで夜半亭三世となった当時三十歳の几董（きとう）が、彼を将来三世に擬せんとする蕪村の請いに応じて、その門に帰している。翌明和八年三月、晴れて夜半亭の文台を開き、

花守の身は弓矢なきかゞし哉　227

と、謙譲の一句を吐いている。同じ年の八月には、文人画の第一人者池大雅との合作で「十便十宜図」を描くなど、名実ともにこの頃蕪村は画俳二道の妙境に達しているのである。かくして大成期をむかえた蕪村の俳諧は、いよいよその真価を発揮しはじめ、翌安永元年（一七七二）には、蕪村七部集の一となっている「其雪影」（几董編）が、翌二年には同じく「此ほと

り」と「明烏」(几董編)が刊行され、蕪村およびその一門の清新な俳風を天下に示すところがあった。おのずから風をしたって、大江丸・樗良・暁台など、中興期の著名な諸国俳人の来たり会して風交を結ぶものが多く、安永期の蕪村は中興期俳壇の中心的存在となり、ために俳業は大いにあがっている。

安永五年には、十二月下旬に、ひとり娘のくのを三井の料理人柿屋伝兵衛方へとつがしめたが、翌年の五月には早くも離縁して引取っている。それとともに安永四年、六十歳の夏の頃から病がちとなり、とかく苦痛をうったえているが、それでも安永六年二月には、「春風馬堤曲」をおさめた春興帖「夜半楽」を、四月には句日記「新花摘」を、また安永九年には蕪村連句の代表作である几董との両吟歌仙「桃李」を成すなど、円熟ぶりを見せている。なおまた安永八年には、蕪村を宗匠とし、几董を会頭とする俳諧修業の連句会を結成し、道立・百池・維駒(これこま)・月居・正白を定連として精進ぶりを示している。

しかし、天明に入ると、ようやくその活動はにぶり、同三年九月中旬、宇治田原の門人奥田毛条に招かれ、門人らと茸狩りにおもむき、俳文「宇治行」を物したのを最後とし、翌十月初旬より病床の人となった。二十四日の夜、門人月渓に筆をとらせ、

冬鶯むかし王維が垣根哉　928

うぐひすや何ごそつかす藪の霜

の二句を書きとめさせ、しばらくしてまた、

しら梅に明る夜ばかりとなりにけり　181

と吟じ、これには初春と題をおくべし、といい終るとまもなく、天明三年十二月二十五日の暁、六十八歳をもって没した。翌二十六日には、門下の数十人が集まって追善の俳諧がもよおされた。一七八三

から檜葉の西に折るゝや霜の声

という、几董の発句にはじまる七十二候を中心とする「から檜葉」という追悼集があまれた。折から歳暮の多忙をはばかり、翌四年正月二十五日、金福寺で葬儀を行い、遺骨は翌々二十七日、

我も死して碑に辺せん枯尾花　949

という蕪村生前の希望どおり、金福寺芭蕉庵牆外に埋められた。

残された娘のくのは、のち甲田氏に再婚し、未亡人のとも女は剃髪して清了尼と号し、長生して文化十一年三月五日に没し、その遺骨は遺言によって、金福寺の夫の墓に埋葬された。

その俳統は蕪村の予定どおり、天明五年に几董がつぎ、夜半亭三世を名のったが、寛政元年（一七八九）十月、几董の死をもって絶えた。蕪村と風交のあった大江丸は、その著「俳諧袋」において、「俳道画道ともに一家をなして世に賞せらるゝ事は、いまだ歿年ほどあらずして、遺墨のあたい尊にてもしるべし」といい、また「俳諧六家集」（寛政八年刊）の蕪村略伝にも「実中興之首唱也」などと、大体において蕪村が中興俳壇の実力第一人者であったことをみとめている。しかし、化政度につづく天保期以後の俳諧俗化のうちに、高踏的な彼の俳風は敬遠され、その俳名はついにほとんど見失われ、その発掘は、明治中期の正岡子規一派の登場をまたなければならなかったのである。

時代と社会

蕪村が生まれた享保元年は、封建体制を強化すべく、紀州藩主吉宗がぼってきされて八代の将軍職についた年である。さらに画俳二道を志して江戸へ出たのが享保末年、三十六歳で西帰した宝暦元年は、暗愚な九代将軍家重を大御所として後見していた吉宗が没した年である。しかも吉宗の緊縮政策に対する反動としての田沼意次の放漫政策が開始された

のは、蕪村五十二歳の明和四年、意次が側用人に取立てられて二万石を領したころからである。したがって蕪村の芸術が大成した時期は、田沼時代、安永・天明の晩年であったとしても、彼の芸術家としての自己形成の時期は、二・三・四十代の享保末年から宝暦年間まで、吉宗政治の後半期であったということになる。

さて、蕪村をふくめて、この時代に輩出した文学者には、元禄期の西鶴・芭蕉・近松らとことなる、いちじるしい特色がある。一言にしていえば市隠的文人趣味である。現実に拘泥することなく、詩画その他の諸芸に遊び、通俗をへいげいして悠々自適するというその性格において、一つの時代を画している。蕪村・秋成・綾足をはじめ、祇園南海(紀州の人、宝暦元年没)、彭城百川(京都の人、宝暦三年没)、柳沢淇園(大和の人、宝暦八年没)、服部南郭(京都の人、宝暦九年没)、都賀庭鐘(大阪の人、天明頃没)というふうにならべると、元禄期の文学者とも、また化政度の江戸戯作者ともことなる前記のような性格が、事あたらしく浮かび上がってくるのである。

彼等の大部分は上方出身であり、しかもすべてが一芸に執せず、国学、漢詩文、和歌、俳諧、小説、絵画、書道などのうち、二三以上の学芸に通じている。したがっていずれもぬきん出てはいるが、多く二流の域にとどまり、趣味的であり、いうならばセミプロ的存在である。社会に対して焦心することなく、自分自身のために芸術活動を行うという、高踏的で反社会的な文人主義的傾向が、この時代の彼等の共通の性格である。したがってわたしはこの章で、蕪村をもふくめてこのような特異な性格の文学者群を輩出した時代の歴史的・社会的条件を考察することになるわけであるが、彼等の大部分が上方出身であるという事実からして、焦点を享保期を中心とする上方町人社会の動向という一点にしぼることにしたい。

慶長・寛永期に、幕藩体制と統一的な貨幣制度が整備されて以来、共存共栄をつづけてきた江戸政権と上方金権のバランスは、上方商業資本の成熟期である元禄期に入ると、まもなくくずれはじめた。それは当初から、限定された農地

経済に依存する幕藩財政に対して、上方の高利貸資本と商品取引資本が、一方的に成長した結果である。そのアンバランスの露頭の一つである通貨の欠乏という経済上の危機を打開すべく、幕府がとった手段は、慶長金銀の質を四割ぐらいおとして、量的にのみ辻つまを合わせた元禄八年の悪質貨幣の鋳造であった。この悪政をその後も再三実施した結果、貨幣への不信は買いあさりとなり、いたずらに富商を富ましめるという、経済界の混乱をまきおこしたのであった。しかも幕府はその失政を糊塗すべく、強権を発動するにいたっているのである。宝永二年五月、当時日本第一の富豪、大阪の淀屋三郎右衛門(五代)を闕所処分に附したのがそれである。

「反古籠」に記載された淀屋の没収財産目録を見ると、莫大な動産・不動産のほかに、「大名衆へ貸銀凡壱億貫目」「権現様(将軍家)へ銀八万貫目」とある。多分に誇張された数字であるにしても、諸藩にとって徳政同様の効果があったわけである。だから淀屋闕所の真の目的は、上方金権の圧迫に対する江戸政権の反撃であったといってよい。その効果はいちじるしく、この闕所事件以後、大阪商人は、「貸した金はとれぬと思え。利子が元金にみちたら元金はもどったのであって、それから先の利子がもうけである」と考えるようになった、と「窓漫録」が伝えている。

このように、幕府の失政と弾圧政策によって、町人社会が動揺し、封建制度下における自分たちの繁栄の限界を悟り、急速に保守化してゆく時、政治の堕落と士民の困窮という封建体制の危機をすくうべく、蕪村が生まれた享保元年に、吉宗が将軍職についたのであった。彼は「諸事権現様の御掟の通り」と、幕府創始期の精神にのっとり、みずから陣頭に立って、尚武と緊縮を根本方針とし、幕府権力の集中強化につとめ、かつ町人勢力の阻止にも手段をつくしている。たとえば享保四年から実施された「相対済法」は、金銭貸借関係の公事訴訟を受理せず、当事者間の相対解決にまかせるむねを定めたものであるが、これによって大名や旗本などに貸金を持つ町人は、事実上回収不可能となったのであるから、のちの寛政の棄捐令と同じ弾圧政策にほかならない。武家に対する債権者代表としての淀屋を闕所にした宝永二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com